

ケニア・ルオ社会における寡婦の生活選択 村落で 生きる・町で生きる

著者	椎野 若菜
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	2004-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008246

ケニア・ルオ社会における 寡婦の生活選択

村落で生きる・町で生きる

椎 野 若 菜

1 寡婦への視線

ルオランドにおける、私にとって初めての人類学の調査は、ちょっとした偶然から、寡婦とともに暮らすことではじまった。彼女をめぐる人間関係に私自身も組み込まれながら、彼女の生活を観察し始めたのである。そののちも、続けて村落で暮らすルオの寡婦たちについて、そして昨夏からは町に暮らすルオの寡婦たちの生活に注目している。

しかし、他社会の寡婦の暮らしぶりをみてみようと民族誌を繰ると、私がルオ社会で観察したような（椎野 [2001, 2003a]）、主体的に生きる寡婦の生活どころか、その姿すらみえないものが多いことに気づいた。

従来的人类学では、フェミニズムの影響を受けるまで、寡婦の存在はおもに妻が婚入した夫側の集団が維持しうる財のように扱われていた。つまり、民族誌に寡婦が登場する場合は家畜や土地な

どの動産・不動産といった、モノの相続と同様の文脈でとりあげられることが多かったといえる。寡婦やその子どもたちがどのように生きているのか、といった姿はそこには描かれず、「寡婦相続」という、寡婦が受動的に「相続」されることが前提である人類学用語が使用されてきた（椎野 [2003b]）。この「寡婦相続」という用語の用い方は、それに関連した用語「レヴィレート」などとともに概念整理がなされぬまま今日にいたるため、使用方法に混乱がみられる。たとえばケニアのグシイ社会やクリア社会のように、言葉の原義として「寡婦相続」と訳せる社会制度をもった社会もみられるが（松園 [1997] ; Kirwen [1979]）、ルオのように、まったく「相続」とは関係のない「性交」を意味するともいわれる「テール」(ter)という言葉が、寡婦と代理夫の関係に使われる社会もある。当該社会において、一般に寡婦は受動的に「相続」されると考えられているのか、それを寡婦自身は実際に享受しているのか。あるいは寡婦は能動的であり、自分自身で代理夫を選択すると考えられ

ており、実際にもそうであるのかなど、個々の社会ごとに具体的にみなければ寡婦の処遇は分からないのである。さらに、寡婦が慣習的な社会制度のもと村落で暮らすか、慣習の及ばない新しい空間、町で暮らすかによってもその生き方は変わってくる。いまだ寡婦への視線は弱く、その研究は弱小であるのが実態である。

この小論では、私が1995年以来、調査を続けてきた村落において、ルオ独特の慣習や信念のなかで生活選択をする寡婦の状況と、昨年より調査を始めた田舎町に暮らす寡婦の生活に焦点をあて、その現状を報告する。そして両者の社会的背景を比較することで特徴を明らかにし、今後の寡婦の新しい生活選択をみてゆく足がかりにしたいと考えている。

2 妻が寡婦になったあとの処遇

ルオの人びとは西ナイロート系に属し、その多くはケニア共和国西部、ヴィクトリア湖畔に居住している。1989年の民族別のセンサスによると、ルオの人口は約265万であり、もともと農牧漁を複合的に営んでいたが、近年は所有する家畜の数は急減している。

調査地はルオ居住地の南部に位置するホマベイ県内で、ヴィクトリア湖岸より20～30キロほど南東の内陸に位置するM村（既婚男性一人を長とする世帯が113世帯）とK村（103世帯）、同じく内陸部にあるN町である。村における換金作物をあえていえば、サトウキビのみである。そのほか、人びとは自分の畑からとれた雑穀の余剰分や野菜を青空マーケットで売ったり、大きな町から食用油や石鹸を仕入れてきて売ったりする、ささやかなビジネスで生計をたてている。町に暮らす人も、公務員のほかは村人と同様の小さなビジネスや仕

立て屋、大工業、キオスク経営などで生計をたてている。

ルオは父系社会であり、一夫多妻の複婚家族が比較的多く、結婚は婚資である牛や現金が支払われて成立する。一人の夫と妻たちを中心に2世代から3世代にわたる拡大家族が、ひとつのコンパウンド(屋敷地)に暮らすパターンが基本である。

ルオ村落社会の核ともいえる最小の社会組織である、拡大家族が暮らすコンパウンド内の生活は、出生順位や妻の婚入順位を重要視する思考(*duong'*)と、おもに性に関する細かな慣習的規範(*chik*)によって秩序づけられている。もし慣習どおりに事を運ばねば、「不幸」(*chira*)が病や死の形となって、とくに違反者やその幼子を襲うという信念が人びとの精神世界に深く根づいている。

夫が死んで残された妻は「墓の妻」(*chi liel*)とよばれ、ジャテール(*jater*, pl. *joter*)とよばれる代理夫(以後、ジャテールと記す)と「テール」(*ter*)という関係を結ばねばならない。一般にジャテールは、基本的に死んだ夫の兄弟がよいとされ、この関係で生まれた子どもは亡夫の名を継ぐこととされる、いわゆるレヴィレート結合である。

ルオ社会において寡婦になった女性は、婚入した亡夫の土地にそのまま居続けるか、あるいは彼女たちが言うには、伝統的な慣習を重んじる夫の親族による圧力から逃れて町に出て行くか、という生活の場の選択を迫られる。調査によると、M村においては37人の寡婦のうち34人、K村の27人の寡婦のうち24人という、ほとんどの女性が亡夫の土地にとどまることを選択していた。町に出ることを選択した寡婦は、それぞれ2人ずつしか見られなかった。

このように夫が死んでも、ほとんどの寡婦が亡夫の土地に居続ける理由は、ルオ社会におけるいくつかの慣習に求められると考えられる。

その一つは、ルオ社会における結婚は、死をもつて解消されないと考えられているためである。妻が亡夫の土地をすっかり去るということは離婚を意味し、そのためには妻側から夫側への婚資の払い戻しが必要とされる。しかしそれはかなり難しいのが現実である。

二つめは、土地の所有権、使用权を夫の介在なしには女性に認めない慣習のためだと考えられる。すなわち、ルオの女性は結婚し、夫あるいは夫方父系リネージの男性成員を通じてのみ、耕作地の使用权を得ることができる。彼女の息子たちは実母を通じて父の土地の所有権を相続する。したがって彼女が夫の土地に居なければ、彼女の息子も、土地を相続できなくなるおそれが生じる。あるいは、生家においては一切土地の権利をもたないルオの女性にとって、婚出し、子どもを得なければ非常に生き辛い社会といえる。

三つめに、死ぬ場所、埋葬場所に関する慣習の規定があげられる。ルオは手厚い葬送儀礼をすることで知られているが、埋葬場所はコンパウンドのなかで社会的属性に応じて細かく規定されている。とくに女性は、夫の元で埋葬されるべきとされている (Shiino [1997], 椎野 [2001])。ルオの村落社会では、出産能力のある女性が独り身であるということはよしとされず、もし寡婦が独りでいると「娼婦」とよばれかねないし、未婚の年頃の女性も早く結婚するようといわれる。というのも、パートナーのいない成人女性が死んでしまったら、彼女の遺体を自分の「妻」のものとして引き受けてくれる男性を探さねばならず、その親族は彼女の埋葬場所について奔走する羽目になる。しかもそうした男性が見つからない場合は、コンパウンドの外に彼女の遺体を埋葬しなければならない。未婚で亡くなった女性は、とくに既婚の親族の女性に対し死後も妬みを抱き、悪さをすると

最も恐れられているからである。また、ジャテールをもったことのない寡婦が死んでしまった場合も、彼女はパートナーのいない状態で死んでしまったとみなされる。ふつう、夫の死後に寡婦は、ジャテールとともに喪明けの性交を行なうが、それを行わずに寡婦が死んでしまった場合、埋葬前に、誰かが彼女のジャテールとして喪明けを意味する性交を形式的に行なわねばなくなる。そのような役を請負ってくれる男性を探すことも、親族にとっては大変な困難である。

3 村落に生きる寡婦

亡夫の土地である村落にそのまま居残ることを選択した寡婦には、ルオの慣習どおりジャテールを選んでテール関係を結ぶか、あるいは慣習に従わずテール関係を結ばずに1人でいるという選択肢も考えるはずである。しかし後者を選ぶ女性ほとんどおらず、二つの調査村ではいずれも2人ずつであった。すなわち、村落に居残ることを選んだ寡婦のほとんどはジャテールをもつ、ということである。テール関係を結ぶ過程において重要なのは、結婚とは異なり寡婦のほうからジャテール候補を選び、働きかける点である (椎野 [2003])。寡婦は自分が選んだジャテール候補の家に3回訪問し、しかるべき儀礼の日にその男性が寡婦の家にきて喪明けの儀礼 (性交) をしてくれるよう取り計らう。その後、男の妻と寡婦の三者で共食をしてはじめて、両者の関係の手続きが完了する。それ以降、ジャテールは寡婦のところへ自由に行き来できるようになるのである。しかしテール関係を解消する儀礼的行為はないので、どちらかがやめようと思った時点で、関係はいつでも終わる。

ジャテールとは本来、夫を亡くした寡婦のため

に経済や労働の援助を行なったり、村落社会においても寡婦の家においても寡婦の「夫」として、かつ寡婦の子どもたちの「父」として振る舞い、実際に寡婦たちの相談にのったり、彼らを守ったりと、生活全般において夫の代理としての役割をすることが期待されている。寡婦が村落で生活するために、このジャテールを必要とする場合が多々あるのである。それは、家屋やコンパウンド建設、屋根葺きなど、いずれもルオ社会において「男の仕事」とされる行為をしてもらいたいときである。そうした仕事を女性が行なった場合、「不幸」がもたらされるという強い信念があるからだ。たとえば、農暦に応じた耕作、播種、収穫といった農作業、冠婚葬祭、子どもの通過儀礼などの、特別な機会に儀礼的に行なわねばならない「特別な性交」の実施のためである。このような必要性が生じたとき、寡婦はその願いをかなえてくれる男を探す。男のためにドーナッツ、ミルク紅茶を奢ったり酒を差し入れたり、何とか約束をとりつける寡婦も観察された（椎野 [2003a]）。しかし現実には、自分自身の家族をもつジャテールが、寡婦の家族のために全面的に協力できない場合が多い。

ジャテールにあまり経済的援助を期待できない、村落に生きる寡婦は、おのおの自分にあった方法でその日の生活費を稼いでいる。よく見られるのは、家の周辺で半栽培の食材である十何種類の野草を摘み、あるいは畑で野菜や果物をつかってマーケットで売ったり、料理用や酒造り用、水瓶用の壺や酒を造って売ったり、ヴィクトリア湖からの魚の燻製や日干し魚を仲介販売したりするなどの、小さなビジネスである。ジャテールに頼らずとも、自分で稼いだ資金でトタン屋根の小屋を建てる寡婦すらいる。村落に暮らす寡婦は、若い場合は新たな代理の「夫」から経済的援助も受け、

うまく営んでいる人もいる。しかし概して、ジャテールのささやかな援助ではやりくりができず、亡夫の土地を基盤にして土地を耕し、あるいはモノをつくり、自力で稼いで生きている場合が多い（ふつう、寡婦は生家からの経済的援助をほとんど受けていない）。

なお、このように村落に留まる彼女たちの学歴は概して低く、無学歴の人がM村で19人、K村で10人、小学校就学経験者がM村で15人、K村で16人、セカンダリーや大学に就学経験者はM村で3人、K村で1人であった。すなわち、村落に生きる女性の約45%が就学経験のない状況である。

4 町に生きる寡婦

さて、次に町に生きる寡婦に目を投じてみよう。インタビューを行なったのは2002年8月、2003年8月で、調査村Mからは10キロ、K村からは20キロほど離れた、郵便局と県庁のあるN町である。週に一度の市が開かれるときに、自転車やマトツ（乗り合いタクシー）を使って村の人びとがでかけていく町である。

インタビューを行なったN町の寡婦21人のうち、ジャテールが今現在いる人は8人、夫を亡くしたばかりでまだジャテールを持っていない人が2人、いままでにジャテールを持ったことはあるが現在はいないという人は2人であった。また持つことを拒否した人は6人、ジャテールはいないが恋人はいる、と答えた人は4人であった。

町に住む寡婦たちの学歴は概して高く、21人中5人は小学校、8人はセカンダリースクールを卒業もしくは中退している。さらに仕立ての訓練校や教員養成大学（teachers college）をでている人も4人いた。そしてもちろん、彼女らはそれぞれに

職業をもっている。職種は小学校や保育園の教師、仕立て屋、キオスク経営、穀物仲介売買のビジネスであったり、井戸の見張り番と使用料の徴収といった仕事である。

町に居を構えている寡婦には、それぞれ多様な背景がある。たまたま亡夫の家が町の範囲内にあった寡婦を除くと、亡夫の地を離れN町に来て暮らしている理由として、亡夫の土地から逃亡してきた、夫方親族や自分の姉妹のつてをたどってきた、職場があるため、などという回答であった。彼女らの多くの住まいは町中の借間である。

具体的に町において、寡婦はどのように生きているのだろうか。3人の事例をみてみよう。

〈事例1：仕立て屋〉

姉の嫁ぎ先がこの町の近くにあり、結婚前から裁縫の仕方を姉から教わっていたため、獣医だった夫の生前からよくこの町を訪ねて来ていた。仕立て屋として働くようになってからの顧客もいた。そこで夫の死後も、夫との子ども2人を連れて馴染みのあるこの町に来て、借間で暮らすことにした。というのも、夫は自分のために婚資をまだ支払っていない自分たちには、夫の実家に居場所がないからだ。夫の死後、夫の両親は冷たくなり、追われるようにしてこちらに来了。一生懸命働いて、自分の土地を買い、家を建てようという夢がある。子どもたちもまだ小さいが、協力してくれると思う。自分が死んだら、この町の共同墓地に埋められるのだと思う。

〈事例2：キオスク経営〉

他クランからの移民であった夫の両親の家は、この町のなかにあった。警察官だった夫とは、生前にはともに首都ナイロビで暮らしていた。夫が亡くなってから、夫方親族を頼って子ど

もたちとともに移り住んできた。初めは夫の弟がジャテールで、家を建ててもらったが、よく嫉妬するし、食事をとりセックスをしにくるだけで何もいいことはないので、やっとのことで追いやった。キオスク経営は順調で、3人の子どもにも良い教育をつけさせるため、私立の小学校にやっている。ジャテールを持つのは懲りたので持つ気はない。しかし恋人はいる。

〈事例3：成人学校の教師〉

セカンダリースクールで同級生だった亡夫は、イーストアフリカンインダストリーズ社というケニアの大企業で働いていた。彼はよく働き、やがて資本を築き、夫の兄弟たちと異民族の地キタレで農園を営んでいた。しかし夫の死後、自らのテリトリーを侵されたことに腹を立てたナンディ民族の襲撃にあい、家も土地もおいて命からがら逃げてきた。親族の近くの方が安心に暮らせると思い、夫の実家が近くにあるこの町に来了。こちらに来了からは、成人学校で教壇にたつと同時に、トウモロコシの売買にも従事し、大学生の娘に仕送りをしながら独りで借間で生活している。セブンスデイ・アドベンティスト（Seventh-Day Adventist: SDA）教会に属しているクリスチャンなので、伝統的なテール関係は結ばない。ジャテールをもつなど考えたこともない。

以上の三つの事例から代表されるように、町に暮らす寡婦の多くはセカンダリースクールや職業訓練校などの学歴があり、算数や読み書き、さらには専門の知識を要求される、現金収入の入る職業についている。また、いずれの寡婦も夫方の姉妹の嫁ぎ先など、生家とは異なる親族関係を頼って町にきている。

また近年の動きとして、親族のネットワークに

頼るのではなく、寡婦、あるいは寡夫となった人たちが呼びかけあい、相互扶助のグループを形成する活動がある。毎週火曜日に、N町のチーフの事務所を借りてミーティングをもち、グループ会員から会費を徴収し、ローテーションで誰かがそのまとまった資金を無利子で借りられるようにしている。その翌週に、その資金をもとに何か生活の向上に役立てたか、商売で幾ら増やせたかなどを報告し、元金をグループに返済することになっている。教師経験者のある寡婦がグループの幹部になっており、政府に「女性グループ」として登録し海外のNGOからの援助もとっているため、活動は現在のところうまく機能しているようで、少しずつネットワークを広げている。

5 寡婦の生活選択とテール関係のゆくえ

以上、村に生きる寡婦と、町に生きる寡婦、双方の寡婦になったのちの生活選択について概要を報告した。

寡婦に関する政府の対応は貧弱である。英国植民地政府時代は居留している白人、インド人の寡婦に対する年金等の制度はあったものの、ネイティブに対しては皆無であった。そして現在のケニア政府も、寡婦に対する生活援助などの特別な政策はとっていない。ルオが居住するヴィクトリア湖沿岸はエイズ感染率が高いため、この「テール」という寡婦と代理夫の関係を結ぶルオの慣習は、エイズ蔓延を促しているとしてむしろ目のかたきにされている。まずは「悪しき慣習をやめよ」と、州知事らが演説したこともある（*Standard*, Aug.15, 2000；*Nation*, Oct. 2, 2000など参照）。寡婦を援助するNGOといっても、もっぱら海外の援助を受けエイズ対策を掲げたもののみで、その活動は、血液検査とエイズに感染した寡婦の健康管理と、彼

女らの家庭の悩みのカウンセリングなどである。

父系的思考が強く観察される現在のルオ社会では、先にふれた慣行のために、女性にとっては亡夫の土地が唯一の生きる場であり、かつ寡婦になれば男性による労働の援助、経済的・社会的援助が必要である。村落における寡婦たちの生活を観察するかぎり、テール関係がすぐに廃れるとは思えない。というのも、人びとが属している何かしらの宗派のキリスト教（例えばカソリックやSDA、アングリカンなど）が説く一夫多妻制の否定や、寡婦が代理夫をもつレヴィレート結合といった慣習的社会制度を否定する教えよりも、村落においては慣習や信念のほうが強く働いているからだ。したがって村落に暮らす若い寡婦がジャテールをもたずにいることは、村人一般からの圧力を一身に受けて大変に困難な生活になるという。冒頭にも述べたように、ルオの村落社会では独り身の女性は恐れられる存在であり、もし独りでいたなら、彼女にはやくジャテールを得るようさまざまな圧力がかかる。これはルオ独特の性観念と慣習、その違反者への制裁にも関わっていると考えられる。

すると、寡婦が「ジャテールをもつこと」を拒否した場合、ほかの選択肢としては町にでるしかない。職をみつけて町で暮らすことを選択した寡婦は、自力で、または自助グループを形成したくましく生きている。だが、そうして町に居を構えることに成功している寡婦は、村落に居残ることを選択した寡婦に比べ総じて学歴が高い。町に出てきたとしても、低学歴ゆえに職を得て生計を確立することができなければ、町を行き交う男性たちに頼って生活してしまう女性もでてきてしまうだろう。さらに、町で土地をもたない彼女たちが年老いて一人で生きられなくなったとき、何で稼ぎ、また埋葬場所をどうするか、という将来の問題もある。彼女たちが埋葬儀礼を担ってくれる教

会に属していない場合、ルオ社会はそういった女性の処遇への定型をいまだに用意していないのである。

ルオの慣習的規範から脱し、亡夫の親族からの圧力をまぬがれるため町にでて生きるか。あるいは亡夫の土地を基盤に、規範を利用しながら村で生きるか。あるいは、町にできた寡婦のグループにみるように、寡婦／寡夫が連帯し相互扶助する動きが村にも出てくるか。寡婦の新しい生活選択のあり方に今後も注目していきたい。

〈参考文献〉

- 椎野若菜 [2000] 「『ルオ人』として死ぬということ——ケニア・ルオ社会における死者の範疇化と葬送方法について——」(『比較家族史研究』No. 14) 69～91ページ。
—— [2001] 「寡婦が男を選ぶとき——ケニア・ル

オ社会における代理夫選択の実践——」(『アフリカ研究』No. 59) 71～84ページ。

—— [2003a] 「ルオの寡婦と男たち」(松園万亀雄編『性の文脈』雄山閣) 81～108ページ。

—— [2003b] 「『寡婦相続』再考——夫亡きあとの社会制度をめぐる人類学用語——」(『社会人類学年報』No. 29) 107～134ページ。

松園万亀雄 [1997] 「グシイの性と生殖」東京都立大学社会科学部研究科博士学位論文(未刊)。

Kirwen, Michael C. [1979] *African Widows: An Empirical Study of the Problems of Adapting Western Christian Teachings on Marriage to the Leviratic Custom for the Care of Widows in Four Rural African Societies*, Maryknoll, New York: Orbis Books.

Shiino, Wakana [1997] “Death and Rituals among the Luo in South Nyanza,” *African Study Monographs*, 18(3, 4), pp.213–222.

(しいの・わかな／日本学術振興会；東京都立大学)